

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

2015年
No. 53
2015年8月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会
THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2015 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

東日本大震災被災地の若者復興支援ピア活動… 1	もっと知りたい女子の性⑨…………… 12
「北東北性教育研究セミナー2015春」報告 …… 8	今月のブックガイド…………… 14
性教育の歴史を尋ねる⑳…………… 11	JASEインフォメーション …… 15

●日本性教育協会・東日本大震災被災地の若者復興支援ピア活動●

人生の夢、再構築に寄り添って、 思春期ピア・カウンセラーが学んだこと

日本ピア・カウンセリング / ピア・エデュケーション研究会代表
高村 寿子

はじめに

未曾有といわれた東日本大震災から早4年半を迎えようとしているが、残念ながら復興の道筋をはるかに遠いと憂えている。日本ピア・カウンセリング / ピア・エデュケーション研究会は日本性教育協会の助成を受け、被災地の若者と同世代を生きる思春期ピアカウンセラーたちが、彼らたちに寄り添い支えることによって生きる力を取り戻し、将来の人生設計に向かっていきいきと自己実現していけるよう、支援活動を継続している。

2015年度も福島県・宮城県で、引き続き目標を、①自分を大切にすること、それは心と身体と将来の夢を大切にすること、②自他の性の受容と特質、妊娠、避妊、性感染症予防等の正しい知識を提供するとともに、性に関する意識や行動を自己決定できる力を育て、自分と同様に相手の将来も大切にしていこうと

大切さを伝える性の健康教育に取り組んでいくこと、とした。

また2015年度、新たに岩手県に活動の拠点を見出したいと考えていたところ、本活動の趣旨に賛同した協力者が見つかり、岩手県で最も被害が大きいとみなされ、今でも地域住民の50%が町内外の仮設住宅での避難生活を余儀なくされている大槌町で、地域の思春期相談活動：ピア・カウンセリング講座が実施できる運びとなった。

実施会場及び内容

(1) 福島県立T高等学校(福島北サテライト校)
T高等学校本来の校舎は、福島第一原発の10キロ圏内にある。昨年I市にあるM大学内サテライト校で、主に福祉・介護系の生徒を対象に実施した。それを見学していた養護教諭の強い希望で、F市に避難しているサッカー、ゴルフなどのスポーツ選手や国際人

を育てる国際・スポーツ科の生徒を対象に実施した。

- テーマ：Love me, Love you
- 実施年月日：平成 27 年 3 月 5 日（木）
14：30～16：20
- 会場：福島県 F 市 T 高等学校
- 対象者：1 年生 34 名（男子 27 名、女子 7 名）
2 年生 27 名（男子 20 名 女子 7 名）
- 思春期ピア・カウンセラー：栃木 8 名、福島 5 名
計 13 名
- 支援者：栃木県 1 名、福島県 1 名 計 2 名
- 実施内容：昨年度 T 高等学校に準じる（詳細省略）

(2) 岩手県大槌町思春期ピア・カウンセリング (生＝性の相談活動) 講座

岩手県において最も被害が大きかったとされている大槌町の復興は、遅々として進んでおらず、町民の 50% はまだ大槌町内外で仮設住宅生活を余儀なくされている。公共交通機関も住民の日常生活の足であった JR 釜石から宮古までの山田線は復旧のめどさえついていない。

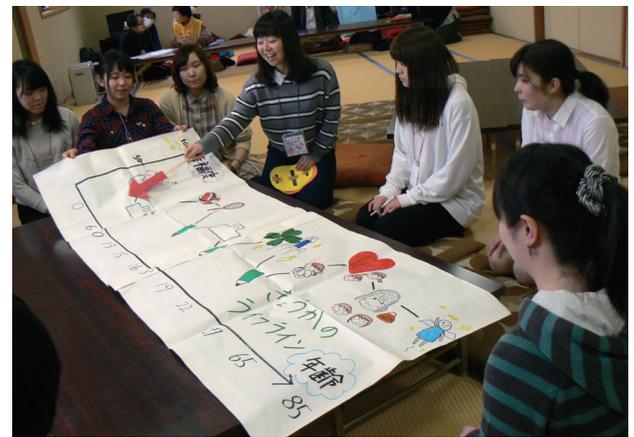
そのような状況下、思春期の若者に対する支援が立ち遅れており、彼らの未来づくりの視点から、2014 年度と同様に、「人生の夢の再構築と生＝性の健康教育が早急に求められている」ことを、日本公衆衛生学会で報告された大槌町の現況報告から把握した。

そこで、本活動の趣旨を大槌町の思春期の彼らにつなげたいと、大槌高等学校へ足を運んだが、学校教育の中に組み入れるには訪問時期が遅いことと本校の生徒には十分な教育をしているからと折りあいがつかなかったこともあって、新たな活動展開として、「仲間と考えよう、これからの夢、そして自分や友達の心からだ……」と題し、社会教育の一環として思春期ピア・カウンセリング講座を実施した。

- テーマ：Love me, Love you
- 実施年月日：平成 27 年 3 月 19 日（木）
10：00～12：00
- 会場：大槌町保健福祉会館
- 対象者：町内に住む小・中・高校生有志
- 思春期ピア・カウンセラー：栃木 9 名
- 支援者：栃木県 1 名 岩手県 2 名 計 3 名
- 実施内容：PR チラシ（資料 1）及びタイムテーブル（表 1）



資料 1 PR チラシ



大槌町保健福祉会館で行われたピア・カウンセリング

表 1

大槌町ピア タイムテーブル

平成 27 年 3 月 19 日 (木) 10:00 ~ 12:00

タイトル: Love me, Love you ♥

全体の目的

- (1) 仲間と人生や自分自身のことについて考え、生きるパワーにつなげてほしい。
- (2) ライフラインを書いてみることで、自分自身を見つめなおし、自分の将来について考えるきっかけになってほしい。
- (3) 過去、現在、未来の自分について改めて見つめることで、一人一人かけがえのない大切な存在であること、自分を大切に思うことと同時に、人生の中で出会う相手も同じように大切に思えるようになってほしい。
- (4) 自尊感情を高め、“自分はここにいていい”という気持ちを感じてほしい。

時間	主内容	具体的内容・方法	目的	物品	担当	音楽
10:00 〔5〕	あいさつ 自己紹介	・ピアの紹介 ・ピアっ子の自己紹介	・ピアっ子を知ってもらう ・緊張をほぐして話しやすい雰囲気を作る ・ピアっ子と仲良くなる	・タイトル ・ピアの説明の紙 ・ハッピールール ・名札の紙 ・ラジカセ ・テーブル	全員	『ねこバス』 ALL THAT JAZZ (軽くて明るい曲調)
10:05 〔10〕	なんでもパ スケット	・アイスブレイク	・緊張をほぐして話しやすい雰囲気を作る ・ピアっ子と仲良くなる ・新しい人間関係を築くきっかけを作る	・テーブル		『Runaway』 Avril Lavigne (アップテンポな曲調)
10:15 〔15〕	ほめほめ シャワー	・ペアになり、お互いに相手の良いところ、素晴らしいところを伝え合う ・伝え合ってどのような気持ちを感じてくれたのかインタビューする	・仲間から褒められることによって、自己肯定感を高め、自分に自信を持ってもらう ・自尊感情を高めることによって、「自分はここにいていい」という気持ちを感じてもらおう ・相手の良いところを見つけるきっかけを作り、誰もが素晴らしいところを持っていることに気付く	・タイトル	2、3 年生ピ アっ子	(ゆったり明るい曲調)
10:30 〔45〕	ライフライン	説明〔10〕、書く〔15〕、発表〔15〕、全体シェアリング〔5〕 ・ライフラインの紙を配り、ピアっ子が自分のライフラインを例として紹介する ・みんなに自分のライフラインを考えてもらう ・グループ内でそれぞれのライフラインを紹介してもらう	・人生を設計することで、自分自身を見つめるきっかけを作る ・過去、現在、未来の自分を考えることに気付く ・みんなのライフラインを見て、自分とは違うそれぞれの人生があることに気付く ・ライフラインが自分自身を表していること、ライフラインを大切にすることは自分を大切にすることであると気付く	・ピアっ子のライフライン ・ライフラインの紙	2、3 年生ピ アっ子	説明 『My World』 Avril Lavigne (前向きで明るい曲調) 書く ピアノ伴奏(ゆったり落ち着いた曲調) 発表 『You're beautiful』 James Blunt (ゆったり明るい曲調)
11:15 〔30〕	大切なもの	説明〔5〕、描く〔10〕、形容詞を考える〔5〕、紹介〔10〕 ・画用紙とクレヨンを使った描き方を説明する ・自分自身にとって大切なものは何か考えてもらう	・自分の周りには自分を支えてくれる人やものがあることに気付く ・支えてくれる人やものがどんなに大切なものか再確認する	・画用紙 ・クレヨン ・ピアっ子の大切なもの	2、3 年生ピ アっ子	説明 『I'm Your Angel』 R.Kelly & Celine Dion (ゆったり落ち着いた曲調) 描く ピアノ伴奏 (ゆったり落ち着いた曲調)
11:45 〔5〕	振り返り タイトルの説明	・目を閉じてもらい、一緒に考えてきたことを振り返る ・タイトルに込められたメッセージを伝える	・私たちが伝えたかったことをまとめ、共有する ・この時間をきっかけに、今の自分や周囲の人たちの大切さに気付いてもらう	・詩の紙	2、3 年生ピ アっ子	オルゴール (落ち着いた曲調)
11:50 〔3〕	感想 終了	・終了後、ピアについての感想を書いてもらう		・感想の紙	全員	

参加するピアっ子 (栃木ピアっ子:9人)

栃木ピアっ子:ぬま、いく、おがわ、けい、はるか、ミノル、イチロー、きょうか、はる

(3) 宮城県I市立I女子高等学校

2014年のO高等学校での「生=性の健康教育」の成果を知り、I市立I女子高等学校から宮城県保健福祉部へ依頼があり、実施することとなった。

担当の養護教諭はその理由を、「対象学年が被災時小学6年生であり、被災直後のため卒業式がきちんとできなかった子も多く。また、震災被害について格差・温度差が大きく、校内で友人の間でさえそのことについて話をすることをしない。そのせいか、さまざまな面、例えば震災被害、学習面、性、家庭経済状態などで格差が大きくなってきており、いずれ大きな問題が引き起こされかねない。そこで、将来の夢を考えるとという作業を通じて、自分を見つめ直し、どう実現していくか考えて欲しい。夢を大切にしていくことは自分の心やからだを大切にすることで、人生の夢は自分だけでなく、仲間にもあることなどを再確認することにより、友人との人間関係を再構成させたい。また、人生設計を書くことによって震災のことを話すかもしれないが、それができて乗り越えられることになるので、そのきっかけにしたい」とのことであった。

- テーマ：Love me, Love you
- 実施年月日：平成27年3月20日（金）
10：55～12：45
- 会場：宮城県I市立I女子高等学校
- 対象者：1年生1組37名、2組37名、3組35名、
4組35名 計144名
- 思春期ピア・カウンセラー：栃木9名、福島6名
計15名
- 支援者：栃木県1名 宮城県3名 計4名
- 実施内容：タイムテーブル（表2）

被災地の高校生の反応（感想文）と 思春期ピア・カウンセラーの想いと学び

(1) 被災地の高校生の反応（感想文）

I市立I女子高等学校に焦点を当てて、被災時小学6年生だった彼女たちが高校1年生となって、被災から復興支援に移ってきた時の流れとともに、人生の夢を再構築し、人生の夢は仲間にもあることに改めて気付き、自分たちの未来づくりを真摯に考え始めるきっかけになったのだろうか？ 彼女たちの感想を抜粋して紹介する。

- 今回、皆とふれあったり自分を見つめなおしたりして、自分を大切にすることや仲間：ピアを大切にすることを学びました。ふれあいや話し合いを通じて、自分のことや仲間のことを今まで以上に知れたと思います。楽しかったです!!
- 人生を振り返ると、まだ15なのにたくさん経験してきたんだなと感じました。改めて周りの人たちのことを考えることができた、とてもよい機会でした。
- 過去を振り返って、16年間でいろんな別れとか出会いがあったなと思った。人は一人ではないということに気づかされました。今までの自分やこれからの自分について、考えることができたので、もっと自分の人生を大事に生きてみようと思いました。ありがとうございました。
- 今までとこれからの人生を表に表してみるのがとても印象に残りました。自分がどれほど青春とかけ離れた人生を送ってきたか、わかったから。これからはがんばります。
- 参加してみて改めて自分の将来のこと、自分が一番大切なものを考えることができました。将来、このようになりたい、なっていたいという計画を立ててみることで、本当に楽しかったです。

(2) 思春期ピア・カウンセラーの想いと学び（感想文）

このような気持ちを抱いた女子高校生に寄り添って、思春期ピア・カウンセラーたちは何を想い、どうすべきか学びを深めたようである。その思いが強く現されている感想文を紹介する。

I女子高校ピア・エデュケーションに参加して （ピアネーム：はるか）

I市を訪れてすぐに感じたことは、復興に向けて進んでいく人々のパワーでした。津波の被害にあった場所でも家が建っており、市民の方々が懸命に前に進もうとしていることを強く感じました。それと同時に少し高いところにある古い家にも気づき、複雑な気持ちになりました。（6ページへ）

表 2

I 市立 I 女子高等学校ピア タイムテーブル

平成 27 年 3 月 20 日 (金) 10:55 ~ 12:45

タイトル: Love me, Love you ♥

全体の目的

- (1) 仲間と人生や自分自身のことについて考え、生きるパワーにつなげてほしい。
- (2) ライフラインを書いてみることで、自分自身を見つめなおし、自分の将来について考えるきっかけになってほしい。
- (3) 過去、現在、未来の自分について改めて見つめることで、一人一人かけがいのない大切な存在であること、自分を大切に思うことと同時に、人生の中で出会う相手も同じように大切に思えるようになってほしい。
- (4) 自尊感情を高め、“自分はここにいていい”という気持ちを感じてほしい。

時間	主内容	具体的内容・方法	目的	物品	担当	音楽
10:55 〔5〕	あいさつ 自己紹介	・ピアの紹介 ・ピアっ子の自己紹介	・ピアっ子を知ってもらう ・緊張をほぐして話しやすい雰囲気を作る ・ピアっ子と仲良くなる	・タイトル ・ピアの説明の紙 ・ハッピールール ・名札の紙 ・ラジカセ ・椅子	各クラス によって 担当者が 異なるた め未記入	『ねこバス』 jazz ver. (軽くて明るい曲調) CD ①
11:00 〔8〕	ミッション	・アイスブレイク	・緊張をほぐして話しやすい雰囲気を作る ・ピアっ子と仲良くなる ・新しい人間関係を築くきっかけを作る	・ミッションの紙	各クラス によって 担当者が 異なるた め未記入	『My World』 Avril Lavigne (前向きで明るい曲調) CD ③
11:08 〔7〕	Let's walk and touch	・エンカウンター	・固定された人間関係だけでなく、 新たな人との関わりを自分自身で 築くきっかけを作る ・2人一組を作る		各クラス によって 担当者が 異なるた め未記入	『Runaway』 Avril Lavigne (アップテンポな曲調) CD ②
11:15 〔15〕	ほめほめ シャワー	・ペアになり、お互いに 相手の良いところ、素 晴らしいところを伝え 合う ・伝え合ってどのような 気持ちを感じてくれ たのかインタビューする	・仲間から褒められることによって、 自己肯定感を高め、自分に自信を 持ってもらおう ・自尊感情を高めることによって、 「自分はここにいていい」という気 持ちを感じてもらおう ・相手の良いところを見つけるき っかけを作り、誰もが素晴らしいと ころを持っていることに気付く	・タイトル	各クラス によって 担当者が 異なるた め未記入	(ゆったり明るい曲 調) CD ⑥
11:30 〔40〕	ライフライン	説明〔10〕、書く〔15〕、 発表〔10〕、全体シェア リング〔5〕 ・ライフラインの紙を配 り、ピアっ子が自分の ライフラインを例とし て紹介する ・みんなに自分のライフ ラインを考えてもら う ・グループ内でそれぞ れのライフラインを紹 介してもらう	・人生を設計することで、自分自身 を見つめるきっかけを作る ・過去、現在、未来の自分を考える ことで、どれも大切な自分である ことに気付く ・みんなのライフラインを見て、自 分とは違うそれぞれの人生がある ことに気付く ・ライフラインが自分自身を表して いること、ライフラインを大切に することは自分を大切にすること であると気付く	・ピアっ子のラ イフライン ・ライフライン の紙	各クラス によって 担当者が 異なるた め未記入	説明 『My World』 Avril Lavigne (前向きで明るい曲調) CD ③ 書く ピアノ伴奏(ゆっ たり落ち着いた曲調) CD ④ 発表 『You're beautiful』 James Blunt (ゆったり明るい曲調) CD ⑤
12:10 〔25〕	大切なもの	・画用紙とクレヨンを使 った描き方を説明す る ・ピアっ子自身の大切 なものを紹介する ・自分自身にとって大 切なものは何か考 えてもらう	・自分の周りには自分を支えてく れる人やものがあることに気付く ・支えてくれる人やものがど んなに大切なものか再確認する	・画用紙 ・クレヨン ・ピアっ子の 大切なもの	各クラス によって 担当者が 異なるた め未記入	説明 『I'm Your Angel』 R.Kelly & Celine Dion (ゆったり落ち着いた曲調) CD ⑧ 描く ピアノ伴奏 (ゆったり落ち着いた曲調) CD ⑨

12:35 〔5〕	振り返り タイトルの 説明	・目を閉じてもらい、一 緒に考えてきたことを 振り返る ・タイトルに込められた メッセージを伝える	・私たちが伝えたかったことをまと め、共有する ・この時間をきっかけに、今の自分 や周囲の人たちの大切さに気付い てもらおう	・詩の紙	各クラス によって 担当者が 異なるた め未記入	オルゴール (落ち着く曲調) CD ⑩
12:40 〔3〕	感想 終了	・終了後、ピアについて の感想を書いてもらう		・感想の紙		

参加するピアっ子（栃木ピアっ子：9人、福島ピアっ子6人）

栃木ピアっ子：ぬま、いく、おがわ、けい、はるか、ミノル、イチロー、きょうか、はる

そしてこの街で生活している高校生はどんな気持ちなのかと考えるとエデュケーションが不安になりました。

いざエデュケーションが始まってみると、担任の先生方から事前に伺っていた生徒さんたちの様子とは大きく異なり、とても元気で明るいクラスでした。先生方や大人の方には見せない一面を見せてくれたと考えるととても嬉しかったです。しかし、事前に伺っていた通りクラス内でグループが存在し、そのグループの結束は想像以上に強く驚きました。今回のエデュケーションでは、新しい人間関係を築くことも目的の一つとなっていました。予定していたプログラムでは既存のグループを保ったままでした。そこで急遽予定していなかったエクササイズを入れました。私は普段あまり関わらない生徒さん同士が同じグループで活動することに少し不安もありましたが、生徒さんは活動を通して会話をし、積極的にお互いの考えを知ろうとしていました。感想の中にも、普段関わらない子と関わるきっかけになり、楽しかったとの声が多数ありました。

ライフラインでは、自分の将来について詳しく書いている生徒さんがあまり多くなかったことが少し気になりました。しかし、高校1年生の段階では私にも、私の友人にもはっきりとした将来のビジョンがあるわけではなかったもので、とにかくこれをきっかけにして考えてもらうことを意識しました。ライフラインの中に、地震や津波、震災といった言葉が出てくる子は私の見た限りはほとんどおらず、やはりどこか話題にすることを避けているのかと感じました。

また先生方から事前に、自分の感情や考えを表現することが得意でない生徒さんがいる、ということを伺っていたので特にペンが進まない生徒さ



参加したピアっ子と筆者たち

んに寄り添うことを意識しました。始めはお互いに手探りの状態でしたが、プログラムが進むにつれて笑顔が見られたり、考えを話してくれたり、少しずつ心を開いてくれたことを感じることができました。

ピア・エデュケーションが始まるまで、震災によって家族や友人、大切な人やものを失った子がいるかもしれないということが私の頭を支配しており、どう関わるべきか分からずにいました。しかし、進んでいくうちにその可能性を考えつつも、生徒さんに寄り添い、一緒に考えることが私たちにとってもっとも大切なことだと気づかされました。

被災者と支援者ではなく、どこで活動したとしても、私たちピアっ子は「仲間」でいることが最も大切なのだと強く感じました。

大槌町ピアに参加して

（ピアネーム：イチロー）

大槌町ピアは従来のピア・エデュケーションとは異なり、学校で行うのではなく地域で行うということで参加者をピアっ子側が集めることから始



大槻町保健福祉会館に飾られた支援者への感謝のことは

まりました。そのため、「何人来てくれるのだろうか・・・」「果たして活動することができるのか・・・」とさまざまな不安がありました。当日になり、開始時間が近づいてくるにつれてドキドキするばかりでしたが参加者が部屋に入ってきてくれたとき、その姿を見ただけでいままでの不安や緊張がすべてふっと消えていきました。そこからは私もピアっ子として、明るく和やかな雰囲気をつくることに貢献できたと思います。

最終的な参加者が4人という少人数で実施したため、一人ひとりとの距離がとても近いものの倍以上に深くかかわれたと思います。また自分自身も初心に帰れたのと同時に、大槻町の参加者の方々とより同じ目線がかかわれたことによって、大槻町ピアのあの時間が私にとってとても幸せな時間だった、と感じることができました。

大槻町ピア後に大槻町の地域の方々がたくさん料理と、またそれと同時に、たくさんのあたたかいもてなしをしてくださりました。あのあたたかい味と優しい笑顔は一生忘れない私にとって宝物となりました。

大槻町ピアでお世話になった小川旅館のご主人や大槻町の地域の方々から震災のこと、津波のことをお話しただいて、やはり当事者のお話は生々しくとても重いものでした。私は今までメディアを通して震災や津波に関して知っているつもりになっていましたが、当事者の方々と同じ空間にいて聞くお話はテレビや新聞などを通しては絶対に感じられないものがあり、とても貴重な経験となりました。この経験を通して、私たちはメディアを通して知ったかぶりをするのではなくもっと当事者の声を生で聞くべきだと痛感しました。



たくさんの料理で歓迎を受けるピアっ子たち

震災のこと、津波のこと、つらいながらも勇気を持って私たちに伝えてくださった大槻町の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。大槻町でいただいた多くの大きなやさしさと勇気を忘れずに心にしっかりと留めてこれからのピア活動に励みます。

大槻町の皆様、本当にありがとうございました!!

おわりに

震災とそれにまつわる種々の別れや出会いが、若者の心に衝撃的な出来事、深い爪痕を残していることを踏まえ、そのなかでも被災地の若者たちが自分たちの人生に希望を持てるように、夢を、将来を再び描いてほしいという願いを込めて寄り添っていった。

さらに被災地の若者にとっての大切な人、愛する人を失った寂しさから性行動の活発化がみられた。そのような状況のなかで、性行動に伴う望まない妊娠や性感染症罹患のリスクを減らすために性に関する正しい知識を持ち、大切な自分自身と大切なパートナーの心と身体を守ってほしいという願いを込めて「生=性の健康教育」を行った。同時に、被災地の若者の自尊感情が低下していることを知り、自分自身をかけがえない大切な存在と思えるよう、種々のエンカウンターを中心とするピア・エデュケーション/ピア・カウンセリング講座を継続・実施している。

最後に、被災2年経過後の2013年度から、本会は日本性教育協会の「東日本大震災被災地復興支援思春期ピア活動助成金」を受けて、継続実施している。改めて深甚なる謝意を申し上げて稿を閉じる。

◎「北東北性教育研究セミナー2015 春」報告◎

“性の健康と権利” 性教育が伝える人権課題

5月30日(土曜日)、青森市男女共同参画プラザにおいて第1回「北東北性教育研修セミナー」が開催された。初めてのセミナーであったが、青森を中心に秋田、岩手、北海道などから51名の参加者があった。WAS(世界性の健康学会)の「性の権利委員会」委員長でもある大阪府立大学教授の東優子氏に、「性の健康と権利」性教育が伝える人権課題をテーマに講演していただいた。講演終了後に「身近な人と身近な地域——今わたしたちに出来ること」というテーマでワークショップ、フロアディスカッションが行われた。

北東北性教育研修セミナー実行委員会共同代表
岡田 実穂

ここでは「性の健康と権利」性教育が伝える人権課題をテーマにした東優子氏の講演の要旨を中心に報告する。

東氏は、大阪府立大学において、「ソーシャルワーク概論」「性と人権」などの科目を担当しており、「性の健康と権利」を主な研究テーマとしている。

世界性の健康学会(WAS)の活動

1978年に創設されたWAS(World Association for Sexual health)は、1999年に「性の権利宣言」を策定しました。2014年には、当初の11項目の権利から16項目の権利に改訂され、日本語訳も出ています⁽¹⁾。そこには様々な性の権利、たとえば「平等、および差別されない権利」「あらゆる暴力や強制・強要から自由である権利」「正義、善後策および救済を求める権利」など、性の自由、望まない妊娠や人工妊娠中絶、性暴力被害やDV、セクシュアリティなどについての権利が宣言されています。

WASは、その活動目標に性の健康の推進を掲げており、これらの活動は世界保健機構(WHO)や国際家族計画連盟など、国際的な諸機関にも影響を与えています。

また、毎年9月4日には世界中で「世界性の健康デー」が開催され、日本でも東京や大阪でイベント

を毎年開催していますのでぜひチェックしてみてください⁽²⁾。

人間にとって一番重要な性器は脳である。「性教育」というと即ちセックスの話と思われる方も多いだろうと思います。

性教育についてのとても有名な言葉で「セックスは股間にあるもの。セクシュアリティは〇〇の間にあるもの」というものなのですが、この「〇〇」に入る言葉、分かる方いらっしゃいますか？

(会場)「人と人の間にあるもの？」

ああ、それは素敵な。そういう面もあるかも知れませんが、でも性は、一人でも成り立ちますよね。他にありますか。

(会場)「耳と耳の間」

ご存知でしたか。そう、耳と耳の間。要は頭です。性については多くの場合、自分自身で考え、感じている。股間ではなく頭です。一般に、人間がセックスをする理由については「生殖(種の保存)のため」と答える傾向が強いわけですが、生殖のために性行為をする時期は人生のほんの短い期間です。また、「性は個人的な話だから…」話さなくていい、わざ





わざと教育なんてする必要はない、といった言い方もよくあります。しかし、たとえば虫歯予防もそうですが、子どもの頃から繰り返し学ぶことで覚えます。性教育は下半身だけの話ではない。性の健康の話は生まれてから死ぬまでの話です。

日本語の“性”という言葉はとても便利に使われていますが、本当はたくさんの意味、表現があります。セックスのこと、ジェンダーのこと、セクシュアリティ・エデュケーションのことなど。

性（セクシュアリティ）教育の目的と役割は実に多岐にわたります。しかし、文部科学省などがいうところの「学校における性教育」の内容や、現実の対応としては、生物学的・解剖学の話や「正しい異性観」「望ましい行動」といった内容に留まってしまう。「正しい」や「望ましい」という表現には注意する必要があります。科学的知識と言われることにしても、「何がどうである」「何がどうであるかもしれない」「何がどうあるべき」は明確に語られなければならないが、しばしばこれらの区別が曖昧に語られてしまっている、というのは、性科学者ミルトン・ダイヤモンドが私たち弟子に繰り返し強調するところです。

リプロダクティブ・バイアス

「セックス・エリート」という言葉があります。たとえば、「異性愛者である」「知的・身体的障がない」「精神的に健康」「若すぎない」「年寄りすぎない」「経済力がある」「教育水準が高い」「結婚している」「愛ある相手としかセックスをしない」「容姿端麗である」など、要は次世代を担う子を産み育てるのに理想的な男女ということです。全部該当す

る方いますか？ これはリプロダクティブ・バイアス（生殖・偏見）です。たとえば同性愛者、障がある、慢性疾患や精神疾患がある、若年者、高齢者、低所得者などは、「セックス・エリート」ではないというブラックユーモアです。

例えば、「若すぎる」ということについて言えば、朝のワイドショーなどでイマドキの高校生のバックの中身チェックをする、というようなコーナーがありますね。ある番組で、バックにコンドームが入っており、私は「素晴らしい！」と思ったわけですが、スタジオにいたコメンテーターは眉を潜め「今時の高校生は！」と憤っていました。若年者のセックスはNG。しかし35歳で誰とも付き合っていないというようなことを見たら、カウンセリングをすすめる。どっちやねん！ と思いますよね。

「セックス・エリート」に当てはまらない人というのは、社会的な抑圧を受けやすい人でもあります。障がいのある人々の性をめぐる言説がその典型例だと思いますが、「当たり前の男/女として」といった表現で、殊更に世間からの承認を求め続けるような状況に追い込まれてしまうのです。

性の多次元性と多様性

そもそも“健康”とは何かと言うと、WHOでは「健康とは、単に疾病や疾患や障害がないというばかりでなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好（ウェルビーイング）な状態であること」と定義されています。性の健康とはその定義に「性に関して」が入ります。性の健康を規定する際にその要因となるのはまず個人の特性があります。そして対人関係、コミュニティ、社会、それぞれと複雑な交互作用をしている。性の健康に関する「問題」や「生きづらさ」は個人が生み出すものではなく個人と社会の接合面で引き起こされるのです。

性の権利という言葉や概念については、既に国内外の法律や政策、国際協定に明記された基本的人権に関する概念に基づいており、国際的に認められたものです。

米国で総括されているところでは、禁欲教育を行った場合と包括的な性（セクシュアリティ）教育を行った場合を比較してみると、「結婚までセック

スをしてはダメ」としか教えない禁欲教育を受けた学生の中で、むしろ望まない妊娠・中絶、あるいは性感染症の罹患率が高くなるという結果が出ています。

禁止した場合、より安全な性行動についての知識を教えるということが出来ないだけでなく、禁止されている手前、学生たちはコンドームを持つことが出来ないし、分からないことがあっても聞くことが出来ないためリスクが高まります。自分にも他者にも権利があると知り、性教育を受け、情報を得ることが必要です。

“性”についてを考える際には多角的に考えていかなければいけません。性的マイノリティ／LGBT などについては、「からだの性（生物学的・解剖学的特徴）」、「こころの性（ジェンダー・アイデンティティ）」、「性（ジェンダー）表現（らしさ、つぼさの演出）」、「性的指向（誰を性愛の対象とするか）」といった4つの次元で捉えると、その多様な性のありようが説明しやすくなります。もちろん、性の多様性というのは、これら4つの次元で説明できるものには限られません。

先程も言いましたように「個人が直面する問題は、社会との接合面で引き起こる」ものです。ここでは、性的マイノリティ／LGBT が直面している人権問題について、取り上げてみます。当事者による権利擁護運動に焦点は、つぎの3つに集約されます。

暴力や嫌がらせから逃れ、ありのままの権利、生命、自由、生活を失うことなく、他者との合意に基づく性的関係を結ぶ権利、平等な市民として認められ、すべての人々に約束された当然の敬意をもって遇される権利、です。これらはすべて私たちが「あたりまえ」のものとして享受している、あるいは少なくとも享受すべきものだと思っている事柄です。しかし、私の師匠でもある性科学者ミルトン・ダイヤモンドは言っています。「自然は多様性を好むが、社会がそれを嫌う」と。日本の社会では性についての問題を輪郭づけるということが難しく、性同一性障害への理解を、などと言う半面、テレビではトランスジェンダーを笑いのネタにしているなど、人権侵害がまかり通っています。

ある調査ではジェンダークリニックに通う児童生徒たちの4分の1が不登校を経験していました。性

的マイノリティといじめについては2012年に自殺総合対策大綱に取り上げられたこと、自殺リスクが全体の7倍以上であることなどからも注目を集めています。2015年4月30日には文科省から「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」という通達が出たことからわかるように、学校など教育の現場で対応をしなければいけないこととして認識されてきています。

転ばぬ先の杖、という考え方が性教育の中では多くあります。しかし、「転ばぬ先の杖」といった態度は、必ずやパターンリズム（温情的庇護主義）を呼び込みます。子どもたちには失敗する、という経験も必要です。性に関して「正解」はない。私たち皆が「間違え権利」がある。しかし、自分で考え、責任ある行動をとるためには、転んでも立ち上がるためには、必要最低限の情報・知識・態度・道具・スキルが必要になります。大人の責任と役割は、これらを提供すること、相談できる関係性を構築することです。「ダメ、ぜったい」とだけ言い放つのではなく、転んだ時に側にいることだろうと思います。最後に、性に関しては一般的な話題や全体的な傾向についてを話したり教えることが必要な一方、それぞれの人間はみな平均的なわけではない。平均と一致することもあれば、劇的に異なることもあります。それぞれ個人の問題として、個別化することが重要なのです。

☆ ☆

ワークショップ：身近な人と身近な地域

東優子氏の講演後、休憩をはさんで、「身近な人と身近な地域——今わたしたちに来ること」をテーマにワークショップが行われました。

ワークショップでは、グループ毎に「個人」「家族」「地域」「自治体」の4項目それぞれに、自分や周囲の経験として阻害されている、守られていない性の健康課題を書き、それらはどう改善されるかを話し合いました。

【注】

- (1) 「セクシュアル・ヘルスの推進——行動のための提言（増補版）」（日本性教育協会）
- (2) 9月6日（日）東京で「世界性の健康デー」記念イベントが開催されます。詳しくは、本誌 p.15 を参照してください。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第29回 「中・高生徒の性教育の根本方針」(文部省初等中等教育局・1952年2月)

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士(保健学)

今回から1950年代以降を中心に述べます。1950年代に入ると、「中・高校生の妊娠や中絶、売春類似行為、その他の性的問題行動など、青少年の性にかかわる問題が、新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどで頻繁にとりあげられるようになった」と指摘されています⁽¹⁾。

一方で、第14回で述べたように、1949年11月に文部省が公表した『中等学校保健計画実施要領(試案)』に準拠した保健の教科書が1951年度から使用され始めます。これには、「成熟期への到達」という性教育に大きく関連する内容が含まれていました。また、第15回で述べたように、同時期の高等学校の「生物」「家族」「時事問題」の教科書にも性教育に関連する内容が掲載されていました。つまり、この時期には、「成熟期への到達」を中心に性教育に関連した内容を扱う教科書が、ある程度、用意されていたこととなります。

ところが、保健の教科書が使用され始めてから1年も経たない1952年2月に、文部省初等中等教育局が右に引用したような「中・高生徒の性教育の根本方針」を作成しています。生徒に「性に関する知識」を与えることをかなり警戒している様子がうかがえます。昇華を奨励し、「性に関する知識」を与える場合でも、「個別指導を本体」とするなど、非常に抑制的です。「成熟期への到達」等で示された内容は一斉授業で教える必要はないと言わんばかりの大きな転換であるようにも感じます。

文部省初等中等教育局は、この「根本方針」を「各地で開かれた中等教育研究集会の討議などを参考に決定した」⁽²⁾と報じられています。「成熟期への到達」で示された教科書の内容について、黒川は「教育現場の認識との間にはズレがあって教科書にある性器の図にこだわったり、『寝ている子を起こす』という反発が強くみられた」⁽³⁾と述べています。第14回でも触れましたが、「成熟期への到達」の内容を教えることに抵抗感を持つ教師は少なくなかったと考えられます。どの程度かはわかりませんが、この「根本方針」には、教師の声も反映されていると考えられます。が、残念

ながら、今回は、私の調査が及ばず、この「根本方針」が作成された経緯や、通達された範囲など、その詳細を述べることはできません。

ただ、この時期の大きな背景としてあげられるのは、1951年9月のサンフランシスコ講和条約の調印と、条約の発効による1952年4月の(沖縄等を除く)占領解除です。大雑把な把握になりますが、この「根本方針」は、性教育についても、いわゆる「逆コース」が始まっていたことの象徴であるようにも思えます。

「中・高生徒の性教育の根本方針」

(1952年2月13日文部省初等中等教育局)

1. 中学校、高等学校における生徒に対する性教育の基本は、生徒に性に関する知識を与えるというよりは、おう盛な活力、精力(エネルギー)を健全な方向に向けてやるような興味深い経験(スポーツ、広はんレクリエーション活動等)を与えるようにすること。

2. 生徒の生理的成熟、発達には著しい個人差があるから、個別的指導が本体であること。学級内、学年内において集団的に一せいに指導するような事柄は、まったく一般的な、しかも科学的な事柄に止まるべきであつて、個々の生徒は自分の生活問題との関連を直接想起させるようなことは避けること。

3. 性に関する知識(正しい健全な)を与えることは性教育全体からみるとほんの一部分である。しかもその場合でも個別指導を本体とし、その生徒がその知識をもつことによつてより有利に発達し得るか否かの教師の判断にあること。教師は生徒が、すでにどの程度の知識を正しいものでも誤まつたものでももっているかを確かめる必要がある。いたずらに新しい知識を与えることは生徒の好奇心を刺激することにもなる。

(4. 各教科における生物の性、5. 社会全般にわたる協力、6. 男女交際の在り方、は、紙幅の都合により、割愛)

(注)

(1) 村松博雄・岡本一彦『性教育学入門』1977年新宿書房p.8。なお、今回は詳しく触れませんが、なぜ戦後初期にさほど報道されなかった青少年の性的問題が1950年代から大々的に報道されるようになったかという点については、小山の論文が非常に参考になります(小山静子「純潔教育の登場—男女共学と男女交際」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学出版2014年)。

(2) 『信濃毎日新聞』1952年3月2日朝刊p.1

(3) 黒川義和編『人間の性と教育』一風社1985年p.17

日本という国の中でも女性に関する問題は山積みですが、今回はアジアの女性が置かれた現状に目を向けてみたいと思います。

7月25日から29日にかけて、2つの国際学会に出席してきました。一つは、シンガポールで開催された「世界性の健康学会」(WAS: World Association for Sexual Health)で2年ごとに開催されています。開催されない年は五大大陸でそれぞれ地域ごとの学会があり、日本は「アジア・オセアニア性科学連合」(AOFS (Asia-Oceania Federation of Sexology))に所属しています。2012年には鳥根県松江市でアジア・オセアニア性科学学会(AOCS)が開催されました。もう一つは、マレーシアのクワラルンプールで開催されたアジア人口学会(APA: Asian Population Association)です。

◇ ◇

会期が重なっており、WASでは自分の発表のほかはあまり時間がとれませんでした。旧友にも会えて楽しく過ごしました。とくに尊敬するオランダのEllen LaanさんのSexual Pleasure: A Gendered Affair(性的快楽:ジェンダー化されていること)という全体会議と、その前に行われたUK(イギリス)のCynthia A GrahamさんのDual Control Model: understanding the variability in women's sexuality(二重制御モデル:女性のセクシュアリティの多様性)は予想通り秀逸な講演で、日本の女性はまだまだ性に関して解放されていないことに気付かされます。二重制御モデルというのは、興奮と抑制の2つのバランスで、興奮が高く制御が低ければリスクなセックスとなり、興奮が低く制御が高ければいわゆる性機能不全となります。

そもそも人がどうやってその人なりの性の規範を身に着けるのかには大変関心があります。教育や文化と言われますが、その中で最も影響が大きいのは成育環境としての親の考え方や生き方でしょう。そしてそれだけではなく個人の好みや性格なども影響因子なのだと思います。思春期から大人になるにつれて、様々な

大人と交流するなかで、そのような考え方は少なからず影響を受けられると思いますが、大人になってその修正が難しいのは何故なのでしょう。自らは自分の性の規範に苦しみながら「そういうものですよ」と言われると、解っているなら変われば良い、とところろろの中で思っている自分がいます。変わりたいといいながら変わろうとしないのは、現状を変えたくないということだと理解しています。外来でも様々な考え方、生き方の女性がそれぞれの問題を抱えてやってきます。ときには患者さんたちがお互いの考え方を交換したらどうだろう、と思うこともあります。

WASでの私の発表は産後の性機能についてでした。自分自身はからだに変化しない男性も産後1か月で性機能が落ちるのが微笑ましかったのですが、男女で産後の性機能の回復時期が異なる結果となり、セックスレスの一因だと思われました。50代にもなって恥ずかしいのですが、初めて研究計画をきちんと立てて取った自分のデータを発表できたことは、私にとって大きな一歩でした。親に頼りながらも子どもも授かり、当直も呼び出しもある常勤勤務医として過ごしてきた約30年の日々は自分ができる精一杯でしたが、子どもたちが成人したこれからは、臨床現場に役立つ性の健康に関する研究をして行きたいと考えています。

◇ ◇

大学時代に避妊の特別講義を伺って以来、研修医の頃から我妻堯先生を師と仰ぎ、人口問題への思い入れは誰にも負けないつもりでいます。学生時代に、人工妊娠中絶は宗教的にいけない、とする友人に対して、女性にとって必要であると論争して彼女と仲たがいで以来、私のなかではずっと気がかりな事柄なのに、あまりに他人事のように語られる人工妊娠中絶。アジアやアフリカなどでは、安全な中絶にアクセスしにくく、同時に性感染症(STI)で命を落とすことすらある女性の健康問題であることも忘れてはなりません。日本ではHIV/AIDSさえ、もはや寿命を縮める疾患

ではないとさえ言われているなかで、まだまだ自分らしく生きるという意味も解らないような環境に置かれた女性がたくさんいるという現実を、マレーシアのクワラルンプールで開催されたアジア人口学会参加で再認識した思いです。

また、アジアでは欧米よりも性別選考が強固に残っています。日本でもなくはないですが、男子を授かるまで産むとか、日本ではないと思われませんが、超音波検査や羊水検査で女兒であることがわかれば中絶するということが演題のテーマになっており、知ってはいたものの、国による違いが衝撃でもありました。

- 世界の中で、1960年代にいち早く人工妊娠中絶を合法化した日本。
- 世界の中で最も長寿を成し遂げた日本。
- 世界の中で最も早く高齢化率が上昇している日本。

合計特殊出生率1.3を下回る「超低出生率」国ですが、少し下げ止まって、台湾や韓国の方がより出生率が下がっているようです。そんな日本ですが、国連加盟国135か国中のジェンダー指数では第104位(2014年)と低く、日本の女性が置かれた状況は、さしづめ透明なカーテンで仕切られたようなものなのでしょう。見えているのに届かない、声は聞こえないような歯がゆさを覚えます。学会場では、日本は夢のような国と憧れの眼で見られ、日本への留学を考えている院生にも会いました。しかし、DVもあれば、子どもの貧困も、10代での妊娠も、抱えた状況は違っても現象は同じです。

人口学会で語られたことは、過去を見据えた上でのこれからの10年、20年のことです。今は日本の後を追っているように見える国が、どの時点で日本に追いつくのか、あるいはミャンマーのように出生増加策が功を奏して出生率が回復するのかなどが注目されています。ミャンマーの発表で面白かったのは、輪廻転生の思想のもとに、生まれた子は前世か来世で違う性別だろうから、性別選考はあまりなく、生まれる子の性別をあまり気にしないとのことでした。それは女性が産む産まないを自分で決めることとも無関係ではないでしょう。

人口問題では、国や地域特性、歴史、習慣や政治などによって、他の国からは想像できないような解決しがたい問題が生じます。児童婚の問題も、女性の年齢

が上がると夫の家族に払うダウリの金額が上がるため若いうちに結婚させようとするようです。日本も、未婚率の上昇や、インターネット依存、「亭主元気で留守がいい」などという風潮、そして質問ではセックスレスにも言及されました。今の日本の問題は、あたかも少子化のために出産で貢献しろと言われている気がすることで、実際の産みにくさ解消になかなか施策が届いていないことでしょう。



人口の転換点は、置き換え水準と言われる出生率2.1を割り込んだあたりではもう遅く、1989年、丙午の年の出生率を下回った「1.57ショック」と言われたあたりにもっと多くの人が気付くべきだったと思います。すでに年間200万人産まれていた1960年代までとは異なり、現在100万人しか産まれていないのですから、人口減少を止めたければ単純計算でも一人当たり4人くらい産まなければならないこととなります。つまり、2人ずつ産んでもどんどん人口は減り、それは今の若いカップルに何とかしろと言っても迷惑なだけでしょう。そろそろ少子化という言葉自体がそぐわないように思います。産みにくさ、のような視点が充実すれば、産みたい女性は子どもを持つことでしょう。希望子ども数を達成するための施策を充実すべきで、実際、アジアを見ても、不思議なほど希望子ども数は2人に集中しています。なぜなのかはわかりませんが、社会のプレッシャーや義理の母の意向などが薄ければ、2人くらいと考えるようです。

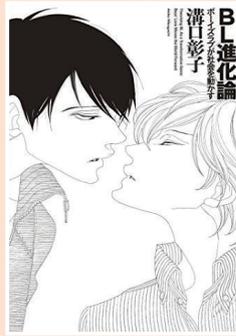
女子は、何のために生まれて、何のために生きるのでしょうか。同じ問いは、男子にも言えます。女子が子どもを産むために生まれてくるのだとしたら、男子はそれを養うために一生働き続けるために生まれてくるのでしょうか。人生50年の時代から人生100年の時代になり、長寿が新たな貧困を生み出しているのも現実です。一人一人が自分らしくどうやって生きるかを考えることに男も女もないのかも知れません。



WASとAPAのプログラム

BOOK GUIDE

今月のブックガイド



『BL 進化論』 ボーイズラブが社会を動かす

溝口彰子著
太田出版
定価 2700 円+税

「進化」への希望を素描

「それは一種の発明である」と本書は記す。「それ」とは、女性向けに男性同士の恋愛や性愛が描かれた小説やコミック等いわゆる BL（ボーイズラブ）のことだ。

満を持して発表された溝口彰子氏による『BL 進化論』は、60年代の森茉莉から、70年代の萩尾望都や竹宮恵子などの作品を経て今日に至る BL の歴史を、女性たちの成長の物語としてとらえようとした労作である。自身が BL 愛好者でもある著者は、「家父長制」「異性愛規範」「ミソジニー（女嫌い）」などジェンダー論やクィア理論の分析概念を用いて、日本社会で女性たちが育んできたこの一大ジャンルについて考察している。

もちろん本書は、女性たちが BL に持ち寄る欲望はそれぞれであり、読者の数だけ多様であるという前提を置く。しかしここではあくまでも BL が必要とされた理由を、「女性が、家父長制社会のなかで課せられた女性役割から解放され、男性キャラクターに仮託することで自由自在にラブやセックスを楽しむことができる」とし、性的抑圧からの解放というストーリーに重ね合わせる。こうした BL 解釈は溝口氏自身も含め、これまでも少なからず語られてきたわけだが、本書の肝は、BL を成立させてきた欲望の変化に着目し、そこに社会の「進化」への希望を素描した点だ。

たしかに BL は、「家父長制」の規範内では性的主体となり得ない女性らが、男同士という組み合わせを用いることで、想像力において自由に性愛を享受できる空間だった。しかしそこも性的差別や抑圧と無縁の楽園とはいえない。例えば、「ホモフォビア（同性愛嫌悪）」などの現実が反映されていることは間違いなく、かつての作品では男同士の恋愛が成就されるたびに、キャラクターは本来はゲイ（同性愛者）ではないのだが、究極の愛を演出するために、「自分はホモなんか

じゃない」というセリフが無邪気に多用されていた。

著者はこれに「ファンタジー・ポルノだから」と開き直ることをよしとせず、「現実への責任を負った表象」とすべしと考えるが、単に、PC（政治的な正しさ）をもって批判するのではない。リアルな他者（この場合、実際のゲイ）と邂逅することによって、想像力に新たな視点が導入され、欲望自体が変容していく…という過程を、膨大な作品群の内側から筋道立ててみせた。

日本社会も 90 年代に入ると、ゲイ・ムーブメントが登場し、BL に対してもゲイ当事者からの批判がなされる。著者は、そこでの論争や「出会い」を通じて、2000 年代に入ると、「現実中存在するミソジニーやホモフォビア、そして異性愛規範を認識したうえで、それらと交渉し乗り越えていく男性同性愛キャラたちや周囲の姿が、BL テキストという表象のなかで、現実よりもベターなたちで描かれる」ようになってきた、という。この PC と個々人の欲望とのギリギリの攻防——表象と現実との交渉を、軋轢と、融和と、創造の過程として描き出した点において、著者の仕事は BL 研究以上の広がりを持ったといってもよいだろう。

結局のところ BL 活動は、表現、消費、コミュニケーション…の積み重ねによって、女性たちが「家父長制」の呪縛から解かれていくトレーニングの場であったと、著者は評価する。そして、そこでの女性同士の関係性はそれ自体、友愛とも性的ともいえる交歓で、あるいは「ヴァーチャル・レズビアン」といってもいいのではないかと主張する。

このように、長年の研究成果をまとめたものであるだけに多くの示唆に富んだ一冊となっている。が、全体としてフェミニズムの思考で構成されているために、そこから削ぎ落とされたであろう部分も少し気になる。著者には、論理にならなかった感情や情緒の断片を掘り起こして、さらに思索を膨らましてほしいと期待する。
(作家 伏見憲明)

9 / 6 (日)
10:00~17:00

第6回世界性の健康デー東京大会

東京性教育研修セミナー2015夏

Sexual Health for a Fairer Society

より公平な社会の実現と性の健康

内 容

10:30 ~ 12:00 「性の健康から考える日本の貧困」モデレーター：亀山早苗氏（ルポライター）

13:00 ~ 14:30 「未来の性教育」性教育活動を実施するユース団体代表による討論会
モデレーター：種部恭子氏（産婦人科医）

14:40 ~ 15:40 「北欧フィンランドの性と健康と教育」

Tommi Paalanen（トミ・パーラネン）氏（WAS 性の権利委員会共同委員長・Sexpo 財団代表）による特別講演

16:10 ~ 17:00 「日本の住宅事情と性の健康」生活者目線によるゆるーいトークタイム モデレーター：赤谷まりえ氏

※1階～3階の3フロアを使い、メインシンポジウムのほか、性の健康に関する団体の活動発表及びブース等を設置。

会 場 ルークホール（東京都新宿区四谷 1-7 持田製薬本社ビル内）

参加費・問い合わせ先等

参加費／大人 1,000 円 学生 500 円 対象／専門学校生、大学生以上

主 催／世界性の健康デー・東京大会実行委員会 協賛／日本性教育協会、ほか

問合せ先／若者世代にリプロヘルスサービスを届ける会（Link-R）内 世界性の健康デー・東京大会実行委員会事務局
（東京都渋谷区渋谷 1-8-3 TOC 第1ビル8F） E-mail info@wshd.jp

▶▶ **9月6日 (日) 18:00 ~ 22:00 (開場 17:30)** ◀◀

第6回世界性の健康デー記念イベント

34年のキャリアを誇る人気セックスセラピスト

Marty Klein（マーティ・クレイン）博士 来日講演&懇親会

セックス・センス（「挿入しない」という快樂）

Sexual Intelligence: What We Really Want From Sex—And How to Get it

セックスで一番求められるもの—それは快樂と親密さ。でもそれはどうやったら手に入るの？ テクニックや見た目、臭い、あるいは加齢による性的機能不全など、「セックスの壁」は日米共通。『セックス・センス』の著者である人気セラピストは、こうした悩みや疑問にどう答えてくれるのでしょうか？

会 場 ドリームストア（DreamStore） 新宿区歌舞伎町 1-14-7 新宿ハヤシビル3F
（JR 新宿駅東口徒歩5分・西武新宿線西武新宿駅徒歩3分）

参加費 3,000 円（JFS 加盟7団体会員）

一般 4,000 円 懇親会費を含む。同日開催される「第6回世界性の健康デー東京大会東京性教育研修セミナー 2015 夏」に参加された方には、1,000 円（学生は 500 円）がキャッシュバック（受付で領収書を提示）されます。

主催・申込み先等 主 催：AOFS ジャパン事務局、WAS「世界性の健康デー」日本事務局、大阪府立大学「性と人権研究所」

定 員：50 名（先着順・要事前予約）

申込み先：AOFS ジャパン事務局今福宛 メール：info@jfs1996.jp FAX：03-3396-8226

①氏名、②所属学会・団体あるいは職業、③連絡先（当日の緊急連絡に対応できるメールアドレスまたは携帯電話番号）を明記のうえ。

10/10 (土)
13:00~17:00

第16回日本性科学連合 性科学セミナー 常識化している性の非常識

講演

- 13:10 ~ 13:35 ① 「あれも、これも、常識化している性の非常識」 北村邦夫氏 (一般社団法人日本家族計画協会)
 13:35 ~ 14:00 ② 「第2次性徴—男と女のターニングポイント!？」 池上千寿子氏 (NPO法人ふれいす東京)
 14:00 ~ 14:25 ③ 「オーラルセックスと感染症…すでに常識なのか？」 濱砂良一氏 (産業医科大学医学部泌尿器科学)
 14:25 ~ 14:50 ④ 「科学にならない『包茎』」 岩室紳也氏 (ヘルスプロモーション推進センター・オフィスいわむろ)
 14:50 ~ 15:10 講演①~④の質疑応答 (20分) 15:10 ~ 15:25 休憩 (15分)
 15:25 ~ 15:50 ⑤ 「本邦の医学部における性医学教育の現状」 白井雅人氏 (順天堂大学医学部附属浦安病院泌尿器科)
 15:50 ~ 16:15 ⑥ 「性依存症加害者の性行動の実態」 榎本 稔氏 (榎本クリニック/日本「性ところ」関連問題学会)
 16:15 ~ 16:40 ⑦ 「認知行動療法の視点から見た性の非常識」 石丸径一郎氏 (東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース)
 16:40 ~ 17:00 講演⑤~⑦の質疑応答 (20分)

会場 埼玉県民健康センター 1F 大会議室 A + B (さいたま市浦和区仲町 3-5-1)

参加費・問い合わせ先等

参加費 / 3,000円 (学生 1,000円)、性科学セミナー + 日本性科学会学術集会 (10日・11日両日参加) 7,000円 (学生 2,000円)
 性科学セミナー + 日本性科学会学術集会合同懇親会 (10日 17:30 ~) 5,000円

問合せ先 / 日本性科学連合 (JFS) 事務局 (〒113-0033 東京都文京区本郷 3-2-3-4F 日本性科学会内)

TEL: 080-1242-5025 FAX: 03-3396-8226 E-mail: info@jfs1996.jp <http://jsss35.kenkyuukai.jp/special/?id=15186>

10/11 (日)
10:00~17:00

第35回日本性科学会学術集会 性のディスクールを超えて

内容

- 特別講演 「民族生殖理論と性」 栗田博之氏 (東京外国語大学総合国際学研究院教授)
 理事長講演 「日本性科学会のあゆみ」 大川玲子氏 (日本性科学会理事長)
 教育講演 「骨盤臓器脱 (POP) と性機能」 永田一郎氏 (防衛医科大学校名誉教授)
 シンポジウム I 「コミュニケーションとしての性を教える」 田代美江子氏 (埼玉大学教育学講座教授)、岩室紳也氏 (ヘルスプロモーション推進センター・オフィスいわむろ代表)、やまがたてるえ氏 (日本性の健康協会理事)、高橋幸子氏 (埼玉医科大学地域医学・医療センター助教)
 シンポジウム II 「エ・アロール~中高年からの性を謳歌する」 永井敦氏 (川崎医科大学泌尿器科教授)、堀口雅子氏 (主婦会館クリニック医師)、金子和子氏 (日本性科学会カウンセリング室)、岡垣竜吾氏 (埼玉医科大学教授・女性骨盤底医学センター長)

会場 埼玉県民健康センター 1F 大会議室 A および B、2F 大ホール (さいたま市浦和区仲町 3-5-1)

参加費・問い合わせ先等

参加費 / 5,000円 (学生 1,000円) 日本性科学会 + 性科学セミナー (10日・11日両日参加) 7,000円 (学生 2,000円)
 性科学セミナー + 日本性科学会学術集会合同懇親会 (10日 17:30 ~) 5,000円

問合せ先 / 第35回日本性科学会学術集会事務局 埼玉医科大学産科婦人科学教室 (〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 38)

TEL: 049-276-1347 FAX: 049-294-8305 E-mail: jsss35@saitama-med.ac.jp
<http://jsss35.kenkyuukai.jp/>